

令和8年3月31日

すくわくプログラム推進事業実践報告書

所在地	東京都新宿区西新宿 2-8-1 東京都議会議事堂 1 階南側
施設名	とちょう保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

生き物の観察

<テーマの設定理由>

<p>① テーマの設定に活かした園の環境や強み 園の近くに新宿中央公園があり散歩先になっている。同公園は緑豊かで、児童が生き物に触れ関心を深めることができる環境である。</p> <p>② 設定したテーマに子供の興味関心があると判断した理由 子どもたちが散歩先でダンゴ虫やカタツムリなどに興味を持つようになり、生き物に親しむ姿が多く見られたため。 生き物の観察を通じて、生き物に親しみを持ったり、興味が深まることを期待して設定した。</p>

2. 活動スケジュール

実施月	実施内容
4月	生き物（おたまじゃくし）の観察
5月	生き物（カブトムシ・メダカ）の観察、飼育
6月	生き物（カブトムシ・メダカ）の観察、飼育
7月	生き物（カブトムシ・メダカ）の観察、飼育
8月	生き物（カブトムシ・メダカ）の観察、飼育
9月	生き物（カブトムシ・メダカ）の観察、飼育

10月	生き物の観察（カブトムシ飼育）の振り返り等
11月	生き物（カブトムシ・メダカ）の観察、飼育
12月	生き物の知識の習得等
1月	生き物に対する親しみの育成等
2月	生き物に対する親しみの育成等
3月	生き物に対する親しみの育成等

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

<p>生き物の観察に資するように、以下のようなものを準備し、環境を整えた。</p> <p>○用意したもの：土、昆虫ゼリー、虫カゴ、図鑑（カブトムシ） 水草、餌、水槽、図鑑（メダカ）</p> <p>○環境の設定：子どもたちはもちろん、保護者もともにいつでもカブトムシとメダカの様子をみることができる場所に虫カゴと水槽を設置し、今、どんな状態なのか写真と共にポップをつけることで、理解と関心を深めるよう努めた。</p> <p>図鑑をみて知識や興味を広げてもらうとともに、調べた知識を観察に活かしてもらうよう努めた。</p>

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

(カブトムシ)

○幼虫期：土替えのときに幼虫の観察。幼虫はどのくらいの大きさなのかな、色は？形は？動くのかな？顔はあるかな？何を食べるの？うんちはするの？など、子どもたちが抱く素朴な疑問を実際の幼虫を観察しながら自分たちの目でみて確認したり、発見したりできるよう、環境整備や振り返り、問いかけなどを通じて促していった。

○さなぎ期：幼虫の皮を脱いでかたまるが、さなぎになっても時々動く様子を観察できるように、人工桶を作った。

○成虫期：土や餌替えのときに成虫を観察。成長の過程をイラストや写真で振り返った。幼虫期とのうんちの違いを観察しながら知った。

(メダカ)

○オスとメスを飼育し、卵を産み、再び幼虫から成虫になる過程を観察した。

○午前中の朝の会の前と、夕方保育の時に観察した

○メダカは3センチほどの大きさだったので、水草の中に隠れているのを探したり、何色に見えるかを友だち同士で会話を楽しみながら観察した。

○途中で何匹か加えたので、色々な種類のメダカを図鑑を見ながら見比べ、色や形の違いを見つけ合った。

○自然の中のメダカと水槽の中のメダカでは、食べている物が違うという話に発展することができた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

図鑑でみたことがある子がほとんどだが、ほんものの幼虫、さなぎ、成虫をみたことがある子がおらず、みんな興味津々で観察していた。特に幼虫が大きく、うねうね動く様子に子どもたちは驚いていた。だが、一人が触ろうとすると、「やってみたい」という思いや「少し怖いけど見てみたい」という感情が生まれてきた。やがてさなぎになると、その様子をじっと観察し、人工桶の中で時々激しく動く様子に驚いたり、喜んだりしながら、カブトムシの成虫になるのを楽しみにする様子がみられた。成虫になり、餌の昆虫ゼリーをあげることを楽しんだり、ゼリーが減っていると「食べたね!」と目でみて実感し、保育者に教えてくれる姿があった。最初は背中をツンと指先で触れようとしては、きゃーっと騒いでいたが、少しずつ角をつまんで持ち上げられる子が出てくると、「じぶんもやってみたい」と思う子が増えてきて、最終的には、怖いといっていた子たちも全員自ら手を伸ばし、自分でカブトムシをもつことができるようになっていた。8月下旬にたくさん卵を産み、最初に観察した幼虫よりもはるかに小さく儂げな幼虫がうじゃうじゃ動く様子を観察した。その幼虫のひとつが巨大化し、元気な様子を大きなうんちと共に観察し、驚きと歓声が再びあがり、嬉しそうに保育者に教えてくれる姿が見られた。

メダカについても、目の前で観察するのが初めての子がほとんどで、最初は不思議そうに見つめていた。

水の中に手を入れてみたい子もいて、なんとか蓋を開けようとしていた。餌をあげてみたいとリクエストする子もいて、何を食べているのか質問する子もいた。

観察していく中で、“しっぽ”や“背びれ”という言葉を知る子もいた。

子どもたちは、カブトムシは幼虫からさなぎ、成虫に姿が変わっていき、メダカはそのように姿を変えないこと、メダカには多様な色の個体がいれば食べ物が水槽と自然下では違うことなどに気が付き、生き物の成長過程や多様性に驚きと関心を覚えた。

また、他の生き物の成長にも関心をもち、例えば蝶はカブトムシのように完全変態すること、ダンゴ虫は脱皮するだけで変態しないことを知るなど多様な成長過程があることに気づいた

(子供同士や保育者との関わり)

子ども同士で、一緒に観察したり、教えあったり、様々な感想を伝えあっていた。図鑑も一緒にみたりしていた。

保育者に嬉しそうに感想や状況を伝えてくれる子ども達の姿が見られた。

保育者から「カブトムシはこうやってもつんだよ」と伝え自発的なふれあいを促したり、餌を食べていることを教えてくれる子に「すごい、食べているね。」、おおきなうんちをおしてくれる子に「わあ。おおきいね。」というように共感したり面白がったりして、関心を深めるとともに自発的なさらなる発見を促すよう努めた。

メダカについては、色が違うことを教えてくれる子に「本当だ。いろいろな色のメダカさんがいるね。」とこたえて感心するなどし、さらなる自発的な探求を促した。

これらのことで子どもたちが新たな発見を促されたように感じている。



◇カブトムシに興味津々の子どもたち



◇初めて成虫とご対面。きゃあ～



◇ポップで親しみを深めてもらう



◇触ってみようかなあ、ちょっと怖いなあ



◇カブトムシに興味津々の子どもたち



◇持てたよ！こわくないよ

5 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

図鑑で見るだけではわからない生き物の姿を、日々目にすることではじめは遠巻きで見
ていた子どもたちも、目を追うごとに自ら見に行く姿が増えていった。
感じたことを言葉にしてみる良い機会となった。

春先はダンゴ虫を目にすることも怖がっていた子どもたちが、カブトムシの幼虫に出会
い、毎日目することで身近に感じたり親しみをつよようになり、成虫になるのを楽しみに
する様子がみられた。成虫になった後は、触ってみたい、持ってみたいと思う子が増え、気
付けば全員が自ら手を伸ばし持つことができたことに驚きを感じた。一方で、卵や孵った
ばかりの幼虫に対しては、「小さいね」「赤ちゃんかな」と小さいものを愛でる気持ちと、触
りたい気持ちを抑える姿もあり、成長を感じた。同時に、生き物に対する関心もさらに高く
なっていき、図鑑でカブトムシだけではなく、クワガタにも興味を持ってよくみるよう
になった。また、卵～幼虫～さなぎ～成虫のサイクルがカブトムシだけではないことを発見
して、あおむしが蝶々になったり、ダンゴ虫が皮を脱いで大きくなっていくことなども理
解し、生き物全般に関心が高くなったことも大きな収穫であった。

また、何気ない会話の中にもメダカが出てくることもあり、メダカに愛着が湧いている
様子だった。

(次の探求活動に向けて)

子どもたちの「なんで？」にこたえられるような取り組みや環境設定を常に忘れず、子
どもたちの意欲と自主性を大切にしていけるような取り組みたい。